

「重層するガバナンスの変遷からみた北の大地と南の島々の環境史」の ために——北と南の二枚の年表の接合のためのたたき台

(2009年9月18日 安溪遊地まとめ
右代さんと児島さん helped 9/22 改訂増補)

「偉大なるアジアの小さな民」(宮里千里、1991『アコークロー』ボーダーインクの副題から)
の物語。すなわち、

明・清との関係の中で経済的に成長し、

拡大する「内地」の影響でしだいに圧迫される「外地」になる、という共通の歩み。

年代にずれはあっても、重層するガバナンスの変遷という視点でみていくと、対応付けは可能
ではないか。

1. 遠距離交易と移住の開始——いきなり遠距離のガバナンスにふれる？

北、オホーツク文化(5世紀から9世紀)

奄、ゴホウラとヤコウガイ(7世紀から9世紀)

2. 交易の拠点できる——「地方政府」のガバナンスの登場

北、渡島半島南部に和人が定着し始める(1428年、後の松前藩)。貿易上のトラブルからコシ
ヤマインの戦い(1457年)

沖、沖縄島南部に中国商人が定着し始める(13世紀前後の沖縄島への漂流記、サトイモ食から
米の二期作へ。「(後の時代に見られる)すべてが現れ、すべてが変わる」(考古学者、三島格
氏の表現))

3. 支配するものとされる者の誕生——「藩」「王国」のガバナンスが地域全体を覆う

北、シャクシャインの戦い(1669年)

北、アイヌ最後の組織的戦い——クナシリメナシの戦い(1789年)

奄、もっとも手強い喜界島が琉球に服属——尚徳王が3000の兵をもって制圧(1466年)

八、八重山最後の組織的戦い——オヤケアカハチの戦い(1500年)宮古・首里連合軍が制圧

奄、奄美最後の組織的抵抗——尚元王が奄美大島の大親達を制圧(1571年)

4. 大交易時代(大帝国の辺縁の民)の始まりと発展

北、山丹貿易と蝦夷錦の時代(黒テンの毛皮が官吏の制服に)

沖、Great Loo-chooの時代(14世紀末から16世紀半ば)

5. 二重三重の支配(直接支配と間接・名目支配)

北、場所請負制の開始と松前による交易の独占(海産物江戸・大坂へ。18世紀初頭から)

南、琉球王国、薩摩に征服される(1609年)

奄、薩摩の直接支配下に入る。

沖、明・清との冊封関係を続ける(1609年以降)

6. 二つの地域交易が大坂市場でリンク(18世紀末～)——小さな民の果たした大きな役割

北、煎海鼠(いりこ)・乾鮑(ほしあわび)・鱧鱈(ふかひれ)の「俵物三品」(中国へ)昆
布などの「俵物諸色」(中国へ・昆布は沖縄でも消費)——生糸や漢方薬などを入手するために
金・銀・銅の流出が深刻な問題になっていた。1715年新井白石は、これらの産品で決済するよう
に定めた(海舶互市新例、正徳新令)。石見銀山が枯渇し、佐渡の金銀山も枯渇したあの時、も
し俵物がなければ、日本は海外への人身売買に走らざるを得なかっただろう(歴史家生田滋氏談)。

南、黒糖(日本国内へ)、硫黄(中国へ)——薩摩藩の調所広郷(ずしょ・ひろさと)の天保
の改革によって、50万両の借金を250年返済とし、奄美の黒糖の全量買い取りなどによって50
万両の貯金をした。その陰で黒糖奴隷となった奄美人や徳之島の西の硫黄島で硫黄採取に従事

した人々こそが倒幕へ向けた軍事力の源泉だった。鹿野政直『鳥島は入っているか』岩波書店

7. 領土確定と国民国家への組み込みへの道

北、幕府直轄地に（1807年～1826年、1855年から再度）

北、「北海道」の誕生（1869年、明治2年）

北、1875年樺太千島交換条約

北、1905年日露戦争後のポーツマス条約で南樺太を領有

南、琉球処分（1879年～）旧慣温存策。宮古八重山の人頭税の廃止と移住の自由の獲得は1903年。

南、1895年台湾の植民地化——黒糖生産の拠点が移る。沖縄から出稼ぎに行くなど、奄美沖縄の環境ガバナンスにもきわめて大きい役割を果たした。

8. 戦争のガバナンス（くわしくは述べられないにしても環境ガバナンス論からは重要）

北、

奄、大島の瀬戸内を中心に、軍事要塞化

沖、艦砲射撃と集団「自決」

八、戦争マラリア

北+南、強制連行した朝鮮人を炭坑や陣地構築に酷使

9. 敗戦と光復

北、南サハリン、「北方領土」ソ連領に

南、奄美アメリカ領に（1953年まで。トカラ列島は1952年まで）密航時代

八、西表島の材木と石炭を済州島に運ぶ（朝鮮戦争中）

南、沖縄アメリカ領に（1972年まで）与那国島の大密貿易の時代、反基地の島ぐるみ闘争……

10. 「開発」と「振興」そして今

北、北海道開発庁を設置（1949年。2001年1月から国土交通省の一部に）

北、北海道旧土人保護法廃止（1997年、アイヌ文化振興法の施行に伴って）

奄、「奄振」こと奄美群島振興開発特別措置法（1954年から延長を重ね、延べ2兆円を投入）

沖、沖縄開発庁を設置（1972年。2001年1月に内閣府の一部局となる）

沖、米軍基地への「思いやり予算」（Host Nation Support 1978年68億円、2000年2567億円）

なお、もっと古い時代についても検討したいが、いまのところは、考古学的な資料の乏しさから、環境ガバナンスについての実証的研究は難しいのではないかと、と思われる。環境ガバナンスを扱う年表としては、1. から始めるのもやむを得ないであろう。

0. 神話的に想念された幸せな暮らしの語り——「となり近所」のガバナンスの時代

実際には、他との交流のない、完全に自給自足的な小さいコミュニティというのは、人類の最初期の時代から存在しなかったのではないとも思われる。ただ、1の段階以前の社会で、環境ガバナンスがすでにならかなり重層的なものであったか、それとも「となり近所」どまりでおおむねは済んでいたのか、そのあり方がつかめないため、仮に想定しておいてはどうかと考えるものである。例えば、知里幸恵、1922『アイヌ神謡集』の序文などの「美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた」イメージ。あるいは、「鼓腹撃壤」の見えざる環境ガバナンスの伝説。治水にたけた堯の治世が数十年たったころ、ある老農夫が歌った。「日が出りゃ働き、日が沈めば休む。井戸を掘って飲み、田を耕して食べる。帝の力がなんであろう。居ても居なくてもおなじことさ。（有老人、含哺鼓腹、撃壤而歌曰、「日出而作 日入而息 鑿井而飲 耕田而食 帝力何有於我哉」『十八史略』）」。